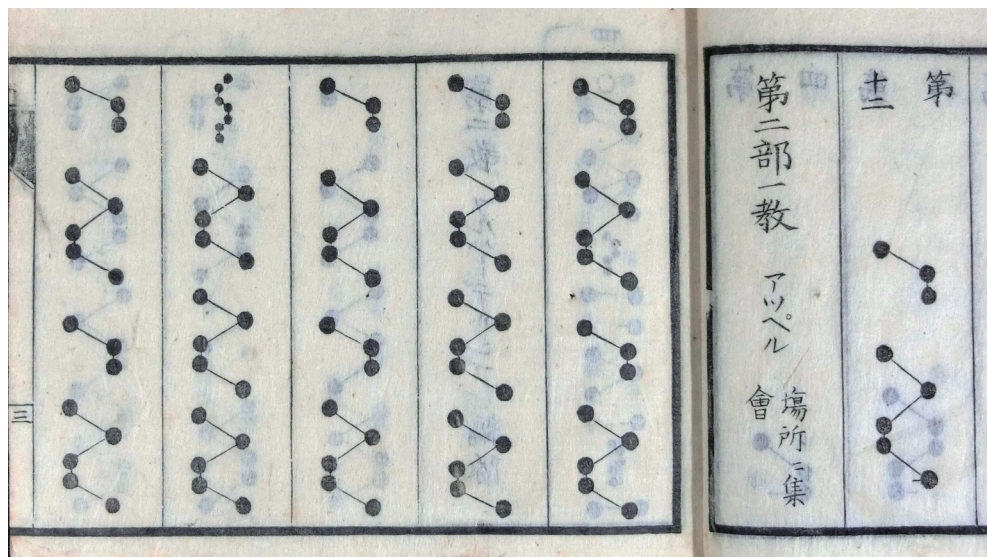


「鼓譜」(軍隊の西洋化)



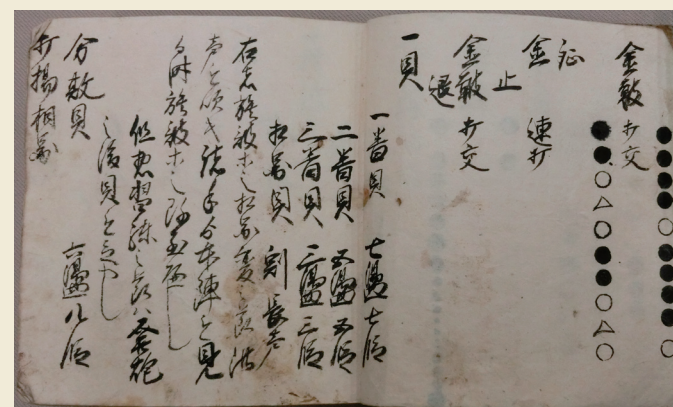
*一般郷土資料1332 「鼓譜 (長門練兵場蔵版)」

解説

写真は、1866(慶応2)年に長州藩で刊行された「鼓譜」と呼ばれるドラムの楽譜です。長州藩では、幕末に軍隊の西洋化を図りましたが、西洋式の軍隊では、号令やドラムの信号で一斉に動いたり、リズムに合わせて行進したりする集団行動が不可欠でした。そのため、西洋式の軍備と一体のものとして西洋の音楽も入ってきました。

集団行動の指揮者となる鼓手(ドラマー)を速やかに養成しなければなりませんでしたが、五線譜と音符で書かれた西洋の楽譜は、当時の人々にとってなじみのないものでした。そのため、碁石を線でつなぎ合わせたような記号を用い、左右の手の動きを図で示した「鼓譜」が作られました。見た目は西洋音楽の楽譜には見えませんが、西洋式のスネアドラム(小太鼓)を用いて演奏されたリズムは、従来の和太鼓によるものとは全く異なるものでした。

ドラムの各リズムパターンには、それぞれ「進め」「止まれ」「集合」など行動の指示が割り当てられていました。



*長州藩では、文化年間に軍制改革として、「神器陣」と呼ばれる新しい陣形が整えられました。しかし、軍の指揮には、依然として従来の和太鼓、鉦、ほら貝が使われていました(毛利家文庫15文武130「神器陣諸相図定例並陣図」)。